真紅の雫が満ちる夜

御倉リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真紅の雫が満ちる夜

【Ｎコード】
Ｎ５７７５Ｘ

【作者名】
御倉リョウ

【あらすじ】
立て続く失踪事件。広がる吸血姫の噂。夜を徘徊する異形。世界の秩序を守る――魔術協会。
真白に輝く月の下。
この身は真紅の雫で満ちていた――――。

／プロローグ（前書き）

どーも、御倉リョウです。
１年ぶりの新作なのですがこの作品を合わせて３作書いていまして
作者の遅筆も重なり更新速度がかなり遅いです。ですが、どれほど
時間が掛かってもかならず完結させますのでよろしくお願いします。
稚拙ながらお読みしていただける皆様に最上級の感謝を――。

／プロローグ

／序

「はぁ、はぁ……」

草木も眠る丑三つ時。ビルとビルに挟まれた狭い道で少女は荒くなった己の呼吸を整えようと試みていた。

汚れに汚れた壁に背を預ける。とすん、と乾いた音が背中から聞こえる。

――服が汚れちゃうわね。

そう思ったが壁から背は離さなかった。その理由は二つ。

体が休息を求めるほど疲弊しきっていることと、そんな汚れがどうでもよくなるくらい彼女の右腕が“血で真っ赤”に汚れているからだ。

その血は他者のものではなく少女自身の血。透き通るような白い肌には痛々しい切り傷があり、そこから少量の血液が滲むように出ていた。

――だいぶ、治癒されてきたけど治りがかなり遅い。よし、少し治癒力の底上げをしよう。

「ぐっ……あっ！」

一瞬の喘ぎ。その刹那、彼女の右腕に刻まれた傷は初めからなかったかのように“消え去り”、破れた袖からは白い肌が覗いていた。少女は壁から背を離し、腰まで届く金髪（ブロンド）を左手でかきあげ、夜空を仰ぎ見る。視線の先には真っ白い月。

――あの魔術師とじゃ相性が悪すぎるわね……。折角の治癒力が弱体化されるし。……あぁもう！　あの女いつか死なす！

自分に傷を負わせた相手への報復を心に誓い歩き出す。が、

「――ぁ、れ？」
くらり。一瞬の暗転（ブラックアウト）。知らず知らずの内に片膝をつき、左手で額と目を覆っていた。なんとか呼吸を落ち着かせ、頭の中をクリアにする。飛びかけた意識をなんとか繋ぎ止めることに成功した少女はゆっくりと立ち上がり、死人のようにふらふらと歩き出す。
「血が、足りない……」
ぼそぼそと呟く。
「……早く、造らないと、“従僕（しもべ）”を」
うわごとのように呟きながら少女は闇に紛れて消えた。

／1

／1

十五歳の男女は訳アリでない限り勉学に励み、高校へと進学するものだ。借金があるわけでも（常時金欠だが）勉学に難があるわけでも（良くもないが）人付き合いが苦手でもない（友達は少ないが）僕はそんな例に漏れず地獄のような受験という名の戦争を『合格』の二文字で終結させ、割合近所に位置する私立の高校への進学を果たした。

さて、高校へと進学したら女教師と背徳的で禁断の恋愛をするかもしれないと考えたが大してイケメンでもない僕は女教師のお眼鏡に適わなかったらしい。そもそも、女教師がいなかった。

正確にはいるのだが全員四十過ぎのオバサンばかりだ。だがしかし、熟女属性のない僕はそんなオバン達を攻略しようと思考することはなくやはり普通に高校生をやっていた。

入学してから早くも二ヶ月が経過した。勉学に関しては可もなく不可もなくを体現する僕はそれほど苦労もなく高校生活を過ごしていた。

『可もなく不可もなく』

つまりこれはどれも同じということ。何をやっても普通。何をやっても普遍的。何をやっても平均値。人生に面白味を見出すことができない僕は死んだように生きていた。

何も変わらない日常。その日常は非日常に変わることはないし、僕が化け物に変わるわけもない。

それはそれでいいと思う。別に僕は人生に楽しみを見出したい訳じゃなく、ただ楽に普通に生きていければいい。

命を懸けて守るべきモノもいらない。そう考えている僕もいつかは命を懸けて守るべきモノを見つけだすかもしれないし人生に面白味を見出すかもしれない。いつなのかは判らない。明日かもしれないし、一秒後かもしれないし、もしかしたら見つからないのかもしれない。

先のことは判らない。僕には判らないし他の人にも判らない。判る人がいたとしたらそれはきっと――

「うおーい、渡良瀬（わたらせ）ー！」

聞き慣れたマヌケ声により独白を中断。

舗装した道路を踏みしめる双脚を止め、声の発信源たる背後を振り返ると僕と同じ学校指定の制服に身を包んだ男が大きく手をふりふり。男はそのまま小走りで僕の目前にやってきた。

男の名は門倉修介（かどくらしゅうすけ）。幼稚園の頃からの付き合いで所謂『幼馴染み』というヤツである。……普通、幼馴染みというモノは美少女と相場で決まっているのに何故こんな寝癖すら直していない男なんだろう。やるせないなぁ。

「何でお前が僕の幼馴染みなんだよ」

「開口一番になんだ！？」

「あぁ、もう嫌だ。美少女の幼馴染みが欲しい。門倉は滅びろ」

「俺だって女の子の幼馴染みが欲しかったよ！」

睨み合う僕と門倉。視線がぶつかり合い火花を散らせる。今の状態を表す四字熟語は『一触即発』。一回触れば即爆発。

と、いうわけで、

「せい」

殴ってみた。

「ぐぼっ！？」

左の拳は門倉の鼻っ面に突き刺さりめきょ、と鈍い音を奏でる。拳を退かすと噴出する命の水（鉄分多め）。

「いふぃにゃりにゃにしひゃがる！？（いきなり何しやがる！？）」
「あぁくっそー、左手汚れた。考えて鼻血出せよなぁ、門倉」
「俺が悪いのか！？」
鼻を押さえながら涙目で怒鳴る門倉を無視し彼の右手に注目。
「なんだ門倉。今日朝練なのか？　にしては遅くない？」
「ん？　……ああ」
門倉は右手に持った竹刀袋を掲げて苦笑。
「いやー、寝坊しちまってな。妹に叩き起こされて今に至るわ・け」
「可憐（かれん）ちゃんも大変だな。だらしのない兄貴を持って。僕の妹になればいいのに」
「いや、可憐はお前の妹だけは嫌だと思うぞ？」
「えぇ！？　僕実は嫌われてんの！？」
マジかよ、懐いてくれていたと思った可憐ちゃんが……ショックだ。
「嫌われてはいねえよ。むしろその逆で――おっとこいつは失言だったな」
危ねえ危ねえ、と門倉。問いただそうと口を開き掛けたとき、「なぁ、渡良瀬」という沈痛そうな声が僕の耳に届いた。
「お前ホントにもうやれないのか？」
「無理だよ」
即答だった。言った僕自身が驚く程の速度で口は動いていた。
「で、でもさ！　もしかしたら良い医者に――」
「無理だよ」
遮った言葉は底冷えするほど冷たかった。僕は己の右肩を見る。
「僕の右肩はもう上がらない。様々な医者に診せてきたけど皆、同じ事を言うんだよ」
『手の施しようがない』ってね。
「まだ諦めるなよ！」

「門倉……」
「ほら、海外にはもっと凄い医者がいるかもしれないしさ！　諦めるのは――」
「――悪いけど！」
ヒートアップする門倉を言葉で遮り、
「もしも肩が治っても僕はもう剣道をするつもりはないから」
「……分かったよ」
「悪いな。それより時間いいのか？」
「え、うわっ！？　やべえ！？」
自分の左手の腕時計を目視した門倉はギョッとし、右手の竹刀袋を握り直す。
「じゃあな、渡良瀬！　加岳井（かがくい）ちゃんによろしく言っといてくれ！」

そして門倉は死んだ。
「死んでねえ！？」
さっさと行け。

†

門倉と別れて程なくして僕は我が学び舎への到着を果たしていた。創設当時は太陽からの紫外線を跳ね返すほどの白さを誇っていたらしい校舎は風化と劣化のダブルパンチにより今では黒くくすんでいた。そんな舗装工事のケチりを尻目に校舎へと進入。
素早く外靴から上履きへと履き替え階段を昇る。目的地は四階。階段を昇りきり、直ぐ隣の教室の更に隣の教室。１－Ｂと書かれたプレートを掲げた教室の前に辿り着いた。
ガラリ。
スライド式の扉は来客を歓迎してんだかしてないんだかよく判ら

ない音を立てて開き、その音を聞きつけたクラスメートの視線が僕をロックオン。
「渡良瀬くん、おはー」「うーす、渡良瀬ー」「チョリーッス、ワタピー！」
多種多様な挨拶が僕を出迎える。その一つ一つにおはようと返し自席へ向かう。窓際後方二番目という睡眠学習に適した席が僕の席。着席と同時に隣の席の女子生徒へ挨拶。
「やあ、加岳井」
女子生徒がこちらを向く。長ったらい黒髪が顔を隠していて表情は窺えない。が、多分彼女は微笑んでいることだろう。
彼女――加岳井美桜（かがくいみお）は僕の数少ない友人の一人だ。性格は温厚、身長は百六十センチ越えとなかなか長身。ぶかぶかの制服の所為か気付きにくいが、実は加岳井美桜、胸がデカい。例えるならミサイル？　光子力ミサイル？　マ〇ンガー？　もしかしてマジ〇ガーですか？　いやいや、富士山というのが言い得て妙。
スカートから伸びる細い双脚をオーバーニーソックスと呼ばれる防御力は低いが破壊力の高い防具で纏っていた。太ももの絶対領域が黄金の輝きを放っている。そんな抜群なプロポーションの女の子が加岳井美桜であった。しかし、だがしかし、クラスの大半が彼女を異性として認識してはいないのだ。それほどまでに彼女は“髪”が長かった。前髪は彼女の顔を隠しているし後ろ髪の先端が膝の裏に届いてしまっている。恐らく『髪オバケ』という名前の妖怪がいたとしたらこんな容姿をしているに違いない。
「渡良瀬くん」
加岳井は小鳥のように首を傾げ、
「ぶっ殺していいですか？」
「いきなりぶっころされるんですか！？」
動揺した。全部ひらがなになるくらい動揺した。
「あ、間違えました。お早う御座います、渡良瀬くん」
「何と間違えたの！？」

「本音と建て前？」
「友情崩壊！？　お前と僕の関係は何なんだ！？」
「友達未満、親の仇以上？」
「赤の他人よりひでぇ！？」
所詮男女の間に友情はないということか……知りたくなかったなぁ。
「すいません。今日ちょっと不機嫌でして」
「不機嫌？　何でまた……って、あー」
僕の思考が一つの可能性に辿り着く。加岳井が不機嫌な理由、それは――
「――今日は『女の子の日』だったのか」
『赤い衝撃』とも言います。
「……」
無言の加岳井。その表情は髪に隠れて見えないが何かどす黒いオーラがががが。
「渡良瀬くん」
加岳井は小鳥のように首を傾げ、
「ぶっ殺していいですか？」
「繰り返すんですか加岳井サン！？」
「あ、間違えました。虐殺していいですか？」
「微妙に変わっている！？」
「虐殺しますね」
「決定事項だと！？」
やべえ。加岳井が恐い。
「あ、そうだ渡良瀬くん」
何かを思い出したかのように手をポン、と合わせる加岳井。一体どんな物騒な言葉を吐くのかと僕は警戒心を強めた。
「最近、騒がれてる失踪事件を知っていますか？」
「……二週間ぐらい前からこの町で立て続けに起こってるっていう事件だろ？　ニュースで見たけど……」

その事件がどうしたんだ？　僕がそう言うと加岳井は『なら』と前置きし、
「“吸血姫（きゅうけつき）”の噂は知っていますか？」
吸血鬼――それは民話や伝説に登場する、ヒトや動物の血を吸う架空の怪物。
一般に吸血鬼は、一度死んだ人がなんらかの理由により不死者としてよみがえったものと考えられている。現代の吸血鬼・ヴァンパイアのイメージは、東ヨーロッパの伝承に起源をもつものが強い。そして一番知名度の高い事は“血を吸われると吸われた者も吸血鬼になる”ということだ。しかし、加岳井は“吸血姫”と言った。鬼ではなくて姫、一体どんな違いがあるのか。加岳井は僕の疑問を感じ取ったのか、説明を始めた。
「吸血姫は吸血鬼の中の王族と呼ばれていて、一般の吸血鬼の力を凌ぐ存在と言われています。
あと、長い金髪（ブロンド）でとっても美しいらしいですよ」
「それは会ってみたいね。でも失踪事件と何の関係が？」
加岳井は長すぎる黒髪を鬱陶しそうに払いのける。……切れよ。
「友達の友達に聞いたお話なんですが」
「胡散臭っ」
友達の友達って……ベタだなぁ。しかし、加岳井は僕の横槍を華麗にへし折り言葉を続ける。
「失踪した人は血を吸われて従僕（しもべ）にされた、と」
「加岳井はそれ信じてんの？」
「いえ、飽くまで噂ですから」
眉唾者ですね、と加岳井は苦笑する。
「席に着けー、糞ガキどもー。成績下げるぞー」
ガラッ！　と破損しそうなほど勢いよく扉を開けた我が担任が教師にあるまじき台詞と共に参上。各々の机で会話の花を咲かせていた生徒たちが蜘蛛の子を散らす勢いで席へと戻っていく。僕と加岳井も例に漏れず会話を止め黒板の前でふんぞり返る不良教師に視線

と体を向けた。ありがたい御言葉の始まりである。

＊

「ようやく終わったか……」

電球の明かりの満ちる廊下を一人歩く。何気なく窓の外へと視線を移せば青い空――ではなくどこまでも暗い黒色が空を浸食していた。青春を謳歌している血気盛んな野球部やサッカー部の面々もそろそろ帰宅しようかしらん、と思考し終えたであろう時間帯である。まあ、端的に言うと

夜ですね。

何故こうなったし。頭の中で今の状況に至るまでの過程をリフレイン。全ての元凶たるは我が担任様の一言であった。

記憶を回想……今から約数時間前。

「渡良瀬。お前、宿題写したろ？」

「……はい？」

昼休み兼昼食時間を終えて五時限目（英語）、宿題であるプリントを回収し終えた担任は唐突にそう宣った。その一声により眠気が雲散霧消。代わりに頭の中で疑問符祭りが開催され始めた。正直、写した記憶は一切ない。が、担任様は腕を組み、僕を切れ長の瞳でロックオン。

「Ａ組の門倉修介とお前の答えが全く同じなんだよ」

教卓から離れ、歩き出す。少しずつ、一歩一歩踏みしめながら僕の席へと近付く。
「間違えてる箇所、間違え方、その全てが同じだったんだよ」
担任様は僕の目の前にやってくるとまるで殺人事件の犯人を追い詰めた名探偵のように指を突きつけて――
「――――お前、写したんだろう？」
お前が犯人だ、何故かそう聴こえた。……いやいやいや！
「ち、違います！　僕は写してなんていません！
門倉が写すならともかく僕が門倉のを写すなんて――はっ！？」
そうか、そういうことだったのか！　僕は動揺していた心を落ち着かせ、担任と目を合わせた。
「先生、これは門倉の“罠”です」
「どういう事だ？」
訝しむような目。僕はその目を驚愕の目にするため語りだす。
「これは時間差を利用したトリックですよ。
つい先日、僕の家で僕、門倉、そして門倉の妹ちゃんの三人で夕食を食べました」
「ふむ」
「食事を終え、リビングでテレビを見ていると突然門倉が立ち上がり、トイレに行くと言いました。そして門倉が戻ってきたときはトイレに行くと言ってから三十分後でした」
「つまり、その三十分の間に写されたと？　しかし、ただ単に腹痛だったからかもしれんぞ？」
その指摘はもっともだ。世の中には一時間もトイレに籠もる迷惑な人間もいるくらいだ。しかし、
「門倉はどれほど腹が痛くても“十分以内にトイレから出る性癖”の持ち主なんですよ。伊達に何年も幼馴染みやってませんから分かります」
僕は遠い目で窓から空を眺める。
「そして、今日の五時限目、つまり今は英語。しかし、Ａ組は四時

限目が英語、宿題を出すのはＡ組の方が早い」
「つまりオレは先に出した門倉ではなく、後から出した渡良瀬が写したと勘違いをしたわけか……。何故気付かなかったんだ。門倉のような剣道馬鹿にこの宿題が解ける事自体がおかしかったんだ」
「そうです」
全てを証明した。これで僕は冤罪を免れ――
「でも写されたお前も同罪だ。門倉は処刑、お前は放課後雑用だ」
「な、なんだってぇー！？」
「あ〝ぁ〟？　なんか文句あんのか？」
「あ、ありません……」
小市民な僕は権力の前にガタガタと震えるしかなかった。

＊

理不尽な回想を終え意識を過去から現在（イマ）へ。迷探偵から普通の高校生へのクラスチェンジを果たした僕は学校と自宅の中間地点にあたる橋を渡りながらこの身に降りかかった不幸を嘆いていた。
「担任め……。下校時刻までこき使いやがって」
この資料を纏めろ、これを郵便局に出しに行け、コーヒー入れろ、肩を揉め、ジャンプしてみろチャリンチャリンなんだちゃんと持ってんじゃねえかちっこんなもんかよシケてんな。
「いや最後のは違えよ」
自分の回想にツッコミ。相当疲れてるらしい。
「痛っ」
上がらない右肩を鈍痛がはしり抜ける。ちなみにこの肩の異常は先天的なモノではなく後天的なモノであり僕が剣道を辞めるキッカケ。
僕は小学生の頃、門倉に誘われ剣道を始めた。可もなく不可もな

くな僕にも才能があったらしく瞬く間に剣道が巧くなった。同学年に敵はなく、大人にすら勝ててしまった。大会に出れば必ず優勝した。周りに天才、神童と持て囃された僕が慢心するのにそう時間は掛からなかった。

そして、中学に上がって初めての大会で事件は起こった。

相手の少年は僕より二つ年上で体格も大きく、力も強かった。その試合中に相手が僕の首を目掛け、突きを放ってきた。中学校で突きは反則だというのに。

予想外な動きに躱すのに遅れてしまった僕にその突きは首には当たらずに防具のない右肩へと直撃した。

その後、病院で診察した結果は肩の骨折。しかも折れて尖った骨が中を傷付けてしまい、治ったとしても以前のように肩は動かないとのこと。医者の言った通り、怪我は治ったが腕が肩から上に上がらなくなってしまいその怪我を期に剣道を辞めた。未練なんてモノはなく、寧ろスッキリした感じだった。もう何年もやってきたのだからもういいか、と思っていたのだ。肩が上がらないというのは日常生活に不便さを感じるが慣れればなんとかなるのであった。

「ん？」

独白を終えるのと同時に奇妙なものを見た。前方約五メートル先にスーツを着込んだ男性が歩いていた。いや、それだけならおかしなことはないのだが、その足取りは千鳥足のように覚束なく、今にも転んでしまいそうだったのだ。

恐らく酔っ払いだろう。

そう思いながら男性と擦れ違おうとすると、

「え、うわっ！？」

突然男性が僕に寄りかかってきてしまい思わず驚きの言葉が出てしまった。件の男性はあー、うーなどと唸るように声を出し、一向に退ける気配がない。

「えーと、大丈夫ですか？」

第一声＝スルー。

「もしもし、酔ってますか？」
第二声と共に肩を叩く＝ぴくりと反応。
男性は僕の肩に埋(うず)めた顔をゆっくりと上げて――
「――え？」
それは生気のない目。焦点の定まっていない胡乱な双眸に僕の顔が映る。その虚ろな瞳はまるで“死人”のソレのようであり、決してこの世のモノではなかった。そう認識した途端、僕の体は硬直していた。絶望感、虚脱感、虚無感。ありとあらゆる負の感情が僕の中で蜷局(とぐろ)を捲く。ヤバい、コレはヤバい。そう思うが脳からの信号は四肢に届かない。
ドスッ。
そんな音が耳に届いた。
腹部を貫通し背中から生える腕。その腕の主は目の前の男だった。腹部を中心に熱が広がる。男はもう片方の腕で僕の体を押さえつけ、首筋にその牙を――。
僕の中で、何かが弾けた。
「――が、あああああ！」
獣の咆哮。
衝動に任せるままに両の手で男を突き飛ばす。男はそのまま手摺りを乗り越えて真っ暗い橋の下へと消えていった。
「が、はぁ」
溜まらずその場にへたり込んでしまう。腹部を確認するともう表現できないくらいグロテスクなことになっていた。素人目にも判るくらい、この傷は致命傷。恐らくあと数分の内に死ぬ。死因は出血多量。嫌すぎる。
「クソ……とりあえず救急車を――」
意味はないかも、と思いながらケータイを取り出そうとする手が止まる。
「マジ、かよ……」
視界に映るのは先ほどの男と同様、虚ろな瞳をしたヒトガタ。そ

れも複数、老若男女問わずで僕の周りを囲んでいた。
――逃げないと……！
そう思うが脚に力が入らない。何より囲まれている。
視界に霞が掛かったかのように白く濁り始める。致命傷である腹部は既に感覚を失いつつあった。僕という存在が少しずつ希薄になっていく。なるほど、これが『死』か……。
「嗚呼、死にたく、ねえなぁ……」
白かった視界が真っ黒に。本格的に意識が乖離（かいり）しかけた時、
「顕現せよ――炎狼（バーゲスト）の咆哮」
凛とした、透き通った声を耳にした。
刹那、視界を埋め尽くしたのは紅蓮。
それが炎だということに気付くのに少し時間が掛かるほどの質量。その圧倒的な熱の奔流は僕を中心に広がり、ヒトガタを飲み込んだ。

炎をあげる橋。ループするナニカの悲鳴。じゅうじゅうと肉が焼け焦げる音。
夜の橋を照らす赤い炎は唐突に消失し、ヒトガタがいた場所には黒い痕だけが残った。
「ちょっとあんた。大丈夫？　生きてる？」
透き通るようなソプラノボイスと共に肩を叩かれた。声の主を見ようと目を凝らすが意識が朦朧としてぼんやりと輪郭だけしか見えない。
「あ、生きてた。――ってちょっと寝るな！　寝たら死ぬわよ！」
ここは雪山か。
声の主は僕の肩をガクガクと揺らす、つか力入れすぎだ！　痛え！
「あーもう！　起きなさい！」
瞬間、視界が弾けた。
声の主が叫んだ直後、左側頭部に衝撃。てか、痛えじゃねえか！
「痛いんですけど！？」

「ようやく起きたみたいね」
スルーかよ。しかし、今の衝撃で視界に掛かっていた靄は消え去り、意識もはっきりとした。……なんとなく、自分がオンボロテレビみたいのようで何とも言えない微妙な気分だった。
声の主を視界に納めるべく俯けていた顔を上げる。
「――――」
絶句。
絹のようにさらさらとした長い金髪。人形のように整った顔立ち。少し力を入れれば折れてしまいそうな華奢な体躯はまるで百合のよう。爪先から髪の先まで測られて作られたような造形美。
そんな完璧という二文字が服を着て歩いているような少女が蹴りを放った姿勢（片足立ち）で僕を見下ろしていた。
真っ白い月を背に携えた少女の姿は酷く幻想的で、死にかけているのにも関わらず、つい見惚れていた。
何よりも僕は彼女の黄金の瞳に魅入られて目を放すことができなかった。
「……何ジロジロ見てんのよ」
僕の不躾な視線が不快だったのか少女が目を細めて非難染みた声音をあげる。
「ふん、まあいいわ。それで、あんたどうする気？」
「何、をだ？」
少女の質問の意図が分からない。そんな僕に彼女は苛立ちを隠さずに声を荒らげた。
「助かりたくないのかって聞いてんの！」
「そんなの、助かりた、いに決まって、るだろ」
「例え化け物に成り上がっても？」
「は……？」
「つまり、今ここで人として死ぬか化け物となって生き延びるか。二つに一つよ」
「いや、意味わか――ぁ」

急に地面に倒れ込んだ。立ち上がろうにも手足に力が入らない。
明滅する視界。
徐々に低下する体温。
狂ったように震え出す体。
死の奔流に意識が呑まれそうになる。
や、ばい……。意識、が……。
「寝るなバカ！　あたしならその傷を治せるんだから！　生きていたいんでしょ！？」
「ああ、まだ、死、にたく、ない。何で、もいい、僕を――」
――助けてくれ。
「分かった」
少女は一言そう呟くとゆっくりとその端正な顔を僕へと近付けてくる。間隔、僅か五センチメートル。呼吸も重なる位置に顔を突きだし、少女は問う。
「あんた、名前は？」
「……渡良瀬、榕（しきみ）」
僕の名を聞いた少女はその名を確かめるように呟きそして、
「それじゃ、これから目一杯こき使ってやるんだからねっ、シキミ！」
満面の笑顔を浮かべた後、僕の首筋に牙を立てた。

／2

／

――ごめんなさい。

真白（ましろ）に輝く月の下。命を啜る少女の懺悔を耳にした。

――ごめんなさい、でも仕方がなかったの。こうしなければ、あたしと貴方は……。

囁きながら少女は真紅の雫を啜るのを止めない。
少女にとってその真紅は美酒であり、またそれは彼女を動かす源。
少女の懺悔は終わらない。
繰り返し。また、繰り返す。
表情は見えない。なのに、彼女が泣いている気がした。
その光景に、胸が締め付けられる。
少女が先に浮かべた満面の笑みを思い出す。それは安堵の笑みであり、同時に消えゆく命を己の手で救えることの喜び。
しかし、その歓喜は消え失せ、訪れるのは悲哀。
命を救うという、少女のその行為は地獄への誘（いざな）いと同義。

――ごめんなさい、全てあたしが悪いの。だから――。

？やめろ、その先は――！？

少女の嘆きを止めるべく静止の絶叫を上げる。けれど、朽ちかけ

たこの身にそんな機能は無く、少女は……囁いた。

――あたしを？殺して？……。

真白に輝く月の下。

この身は真紅の雫で満ちていた――――。

／2

唐突に目が覚めた。未だに覚醒しきっていない頭で今の状況を確認する。

どうやらここは僕の家の玄関らしい。見慣れた調度品が視界に入る。周りが暗いことから今は夜なのだろう。こんな所で寝ていたことが既に奇妙だというのにさらにどういうわけか外側に頭を向けて眠っていたらしい。

「……僕ってこんなに寝相悪かったっけ？」

いや――

「――違う」

ゆっくりと震える指で首筋に触れる。しかし、そこに在るべきモノがない。

「傷が、ない？」

僕は確かに少女に噛まれた筈だ。だというのに傷も歯形もないとはどういうことだろう。

「え、まさかの夢オチ？」

その考えも間違い。何故なら今、僕が着ている学生服の腹と背中に位置する場所に腕一本分の穴が開いていたからだ。

昨夜、死人のような男に貫かれたというなによりの証拠。

「塞がってる」

塞がっていた。元々そんな傷は無いとでも言うように、昨夜の邂逅を否定するように。
緩慢な動作で身を起こす。
「いっ……てぇ――」
身体のあちこちを擦っているらしく体中（主に背中）が痛みを訴える。とりあえず救急箱はリビングだったなぁ、と思いながら廊下を数歩進み、リビングへの扉を開くが視界は真っ暗。手探りでスイッチを押すと少しの遅延（ラグ）の後、ぽつぽつと灯りがともる。
「は？」
長い金髪の少女がソファーに身を沈めていた。
歳は恐らく僕と同い年だろう。見目麗しい容姿に白磁の陶器のように白くて滑らかな肌。その姿はただ眠っているだけなのに気品すら漂わせていた。
そんな高嶺の花のような存在が無防備に安物のソファーで寝息をたてていることに若干の違和感すら感じた。

ていうか、さっきの少女だった。

「……あー」
やっぱ夢じゃなかったんだー、と思いながら立ち尽くす。どうするべきかと思案するが、普通に起こせばいいと脳が結論を叩き出した。色々と聞きたいこともあるし。
てか、起こすときって身体に触れるよな？　……美少女にボディタッチとかマジご褒美！
「変態じゃねーか！」
虚空に向け右手を突き出す。典型的なツッコミである。
「よし、現実逃避終了。……おい、起きろよ、えーと？」
そういやこの娘の名前シラネ。
自分の肩を抱き締めるように眠る少女を無難なところで肩を揺すり（めっちゃ華奢！　柔らかい！）覚醒を促す。

「う……ぁン」
うおーーいっ！　悩ましい声を出すなあああ！？
「……お」
「お？」
「……起こしたら殺す」
「なにその寝言！？　お前実は起きてんだろ！？」
「ぐぅ……」
「え、マジ寝なの？」
その後、揺すっても少女が起きないので先に治療を済ませてしまうことにした。棚から救急箱を取り出し、手早く治療していく。
「相変わらず手慣れてるなぁ」
と自画自賛してみる。
昔は剣道をやっていたので怪我の治療はやり慣れていたのだ。
――身体に刻み込んだ動き。
否、身体に染み付いた動き、の方が正しいのかもしれない。
「どうでもいいけどな」

「……あんた、何してんの」

不意に投げ掛けられた声。驚いて振り向けば、ソファから立ち上がった少女が僕を見ていた。
信じられないモノを見たような顔で。

？バケモノを見るような目で？渡良瀬樒を見つめていた。

「何って、治療してるん、だけど……」
そう言ったのも束の間。伸ばされた左手が僕の前髪を払いのけ、接近するガンメン。
「お、おい――」
「じっとして」

有無を言わせない物言いに口を噤み、されるがままに不動。
白く透き通る肌。整った鼻梁。薄い紅色の艶のある唇。見目麗しい容貌が、その額と僕の額が合わさる。まるで熱を計るように。少女の顔によって光が遮られ視界がうっすらと暗く染まる。
測るまでもなく間隔はゼロ距離。彼女いない歴＝年齢のオトコノコ（つまり僕）にとってこの行為は耐性のない行為であり、ドギマギしない筈がなかったり……！　とゅーか、これでときめかない男がいるのかいやいない！　（↑反語！）
突然の少女の行動により僕は一瞬で動揺した。思考が乱れきった直後、彼女はぽつりと「そっか、そういうこと……」と呟いた。
少女が一歩下がり間隔に少しばかりの余裕が出来る。僕はと言うと、唐突に消失した額への温もりに一抹の名残惜しさを感じてしまって――僕変態っぽいな！
「本来ならね」
少女は唐突に語り出した。
「治療なんて必要ないはずなのよ、あんたとあたしは。だってあんたとあたし――」
少女の瞳が僕を射抜く。
見透かすように。
はたまた、量るように。
「――人間じゃないもん」
「は？」
「待ってなさい。証拠、見せてあげる」
突然のカミングアウトに呆然としていると少女はキッチンに引っ込んだ。程なくして戻ってきた彼女の右手に握られているのは一本の包丁。って、包丁！？
「待て待て待て！　暴力は憎しみしか生まないから！　そんなの生むなら少子化問題を解決してくれ！」
僕は混乱のあまりよく判らないことを言った。
「それ、普通にセクハラだか、ら！」

そう言いながら彼女はおもむろに手首を切り裂いた。
「な、何やってんだよ！？　痛くないのか！？」
「……痛いに決まってんじゃない、ばかぁ。ぐすっ、涙が出るくらい、痛いわよ……」
唐突のリストカットに驚いたが直ぐに少女に駆け寄り手首を見た。
傷口からはどばどばと血が溢れて――ない。いや、確かに血は出ているがそれは擦りむいた程度の出血でおよそ手首を切って出る量には程遠かった。
驚きを言葉にできなかった。何故ならどういうわけか手首の傷がじわじわと塞がり始めたからだ。数十秒と時間を掛けて傷口は完全に消滅した。最初から傷なんてなかったかのように、白くきめ細かい肌がそこにはあった。
「お前はなんなんだ……？」
少女は細い腰に手を当てて、
「あたしはリア・エディト・シュッセル。偉大なる祖にして最強種、吸血鬼の王族――？吸血姫？よ」
己が存在を誇りに思う、威風堂々たるその姿はまさしく姫に相応しかった。
「き、吸血、姫？」
「そうよ。そしてあんたはあたしの眷属――つまり従僕ね」
「な、何で！？」
「何でって……あたしに噛まれたじゃない」
「だからなんなん――っ！？」
唐突に、思い出した。吸血鬼に血を吸われると吸われた者も吸血鬼になるということを。
血を吸われることでヒトを辞め。
化け物になることで血を啜る。

『人として死ぬか化け物となって生き延びるか』

例え無様に生き恥を晒しても、死ぬことだけは嫌だった。だからその問いに僕は化け物になることを望んだ。
吸血鬼。
十字架を恐れ、ニンニクに恐怖し、太陽に怯え、銀に慟哭(どうこく)する。
腹部を貫くほどの傷を治癒する回復力。周囲の存在を焼き尽くす異能。ナイフの様に鋭く、他者の喉に喰らい付く牙を持つ異形の存在。
「マジかよ……」
驚きを言葉にしてみるがその行為に意味はない。何となく分かっていることではあったのだ。
「理解した？　したなら――」
少女は黄金の瞳を僕の身体に向けて至極真面目な口調で、
「――服を脱ぎなさい」

†

引ん剥かれた。
唐突の発言で固まっていると業を煮やした少女によって僕は上半身を脱がされた。僕も健全な青少年なので、実は少しだけアハーン（はぁと）な展開を想像しなかったわけがなかった。だが、
「エロいことは何もなかった」
「何言ってんの？　馬鹿なの？」
辛辣な言葉とともに消毒液が染み込んだガーゼを背中の傷に押し付けられた。かなり痛い。
さて、十八禁な展開はなかったわけだが代わりに僕は少女の治療を受けていた。

何故なのか。
……な、何でだろ？
「てか、僕ってその……吸血鬼、なんだろ？　腹の傷が治った時みたいに治らないのか？」
「確かにあんたは吸血鬼だけど、今はその能力は一切使えない――いえ、使っているからこそ使えないの」
使っているから使えない？
意味が分からなかった。少女は僕の疑問に気付いたのか説明を始めた。
「えっと、シキミは自分の中の吸血鬼としての力を？吸血鬼の力の九割を使って？押さえ込んでるの。
だから吸血鬼としての気配は限りなく薄いし、能力も全く使えない。毒を以て毒を制すみたいな状態ね。恐らくシキミは自分が化け物だってことを拒絶していて、無意識にそんなことをしてるんだと思う」
拒絶……はしてるんだと思う。
頭では僕が化け物になったということを受け入れたつもりでいたけど、心の奥底ではその事実を僕はきっと拒絶しているのだと思う。
だからこその力の抑圧。
ただそれは現実からの逃避でしかないのだと、思う。
「……そういや、何で僕こんなにズタボロなんだ？」
話題の転換。
これもやっぱり現実逃避なのだろう。
そんな自分に嫌気が差す。
「あぁ、それ？　あたしがあんたを引き摺って出来た傷だけど？」
「おい！」
キレた。
ツッコミを忘れて只々キレた。
「何でキレてんの？　欲求不満？　情緒不安定？」
「僕が悪いみたいに言うのをやめろ！　誰だってキレるだろうが！

？　お前のせいで後頭部の髪が薄くなったんだよっ！　将来僕の毛髪が禿げ散らかったら責任は取れんのか、あ〝ぁ〝ん！？」
一気に捲し立てたせいで息が乱れる。ぜぇぜぇ、と呼吸する僕に対し少女はただ一言。
「……ツッコミ長い」
うぜぇっ！
「まあまあ、良いじゃない。あたしとあんたの仲なんだから」
「……ちなみにどんな仲だ？」
「ご主人様とその下僕」
「出てけ！」
「ほら、特別に舐めることを許可するわ」
スルリと脱衣される靴下。
「そこから現れた白くきめ細かい美しい足に僕の視線は釘付けになった。
僕はゆっくりと彼女の前に跪き、彼女の足の甲に舌を這わ――」
「せねえよ！　モノローグを捏造すんな！」
「ぅン、ふふっ、上手ね。あっ、ぁん！？　こ、こら、そこはやめなさい！」
「お前がやめろ！」
ご近所さんにあらぬ誤解を与えそうだよっ！
いやまあ、それは置いておこう。今はそれよりも――
「――正直に答えてくれ」
僕は言った。
意を決し、勇気を振り絞り、気持ちを奮い立たせながら。
「お前が――失踪した人々をあんな、死人のようにしたのか？」
生気のない焦点の定まっていない瞳をした男。昨夜、橋の上で僕の腹を貫いた異形。
恐らく彼らが失踪事件を引き起こしているのだろう。そして加岳井のあの言葉。

『失踪した人は血を吸われて僕（しもべ）にされた』

もしもそれが本当のことならば、きっと僕もああなってしまう。知性の欠片もない死人のようなその実、獰猛な獣な彼ら。それだけは――？死んでも？嫌だ。

もう死んでいるようなものだけど。

人としては死んだのだけど。

化け物としては生きている。

「違うわ。――あたしじゃない」

少女は――リアは首を振って否定する。そのことに少しだけ、安心した。

「やったのは異端審問者の巣窟、魔術協会。その序列第六位『断罪』」

「断罪？」

「異名よ。本名はヴァン・フリークス。断罪以外にも『平和の創り手』とも呼ばれている頭のおかしい男よ」

魔術協会は頭おかしいのしかいないけどね、とリアは嗤った。

「平和の創り手って……そんな奴が何で」

「平和のためなら手段を選ばず不穏分子を裁く、だからこその『断罪』と『平和の創り手』」

「不穏分子って？」

「あたしとあんたに決まってるじゃない。吸血鬼なんて不穏分子以外の何者でもないし」

「じゃ、じゃああれか？」

聞くまでもないこと。だけども聞かずにはいられなかった。不安の塊ともいえるこの問いを目の前の少女に否定してもらうことを望みながら口にした。

「僕たち退治、されるのか？」

「だーいじょうぶ。言ったでしょ、あたしは偉大なる祖にして最強種、吸血姫よ？」

リアの迷いのない回答に少しばかりの安寧を得た。「それに――」とリアは続けた。
「――シキミもいるしね」
微笑。全幅の信頼を寄せていなければ出せないような完璧な、微笑。
流石に戸惑う、ていうか恥ずかしい。
「あたし一人だったら退治されるしかなかったけど今はあんたがいる。あたしの眷属なら戦力としては全く問題ないわ。だからシキミは早く現状を認めて眷属として役に立つこと」
「……善処するよ」
ならば、僕は一つでも情報を取り入れなくてはならない。
生き残るために。
死なないように。
「ほら、両腕上げて。包帯巻くから」
「え、あ、いや。僕肩が」
肩が上がらない事を説明しようとするがリアは問答無用で僕の腕をつかみ、
「いいから上げなさ、い！」
？右手を天井に向けて引っ張った？。すんなりと上がる肩。所謂これは万歳の姿勢。ちなみに万歳というのはめでたい時や――いやそんな事はどうでもいい。
今思考すべきことは万歳の意味ではなく手の施しようがない、とまで言われた肩が何故上がったのか、それだけだ。しかし思考は纏まらず唯々呆然と天井を向いた指の先を見つめることしかできない。
「はい、巻き終わったからもう下げても、ってどうしたの？」
呆然とする僕に気が付き訝しげな視線を向けてきた。僕は肩を痛めていたことを説明すると彼女は憮然としながら平坦な大地のような胸を反らし得意げに笑った。
「昨日、死にかけてたあんたを助けた時についでに治ったみたいね。吸血鬼の再生力をもってすれば当然の結果ね、わはは」

「……そっか、はは」
複雑な気分だった。
折角肩が治ったとしても僕はもう真っ当な道を歩むことは出来ない。
人ではなく。
化け物なのだから。
友人と会うことも学校に行くことも出来ず、太陽を見ることは叶わず暗闇を見つめて生きるしかない人外。得た物と失った物が圧倒的に釣り合っていないのだ。
「確認するまでもないけれど、今私たちの最重要事項はシキミの眷属としての覚醒。でもあまり時間がないから覚醒には少し手荒な方法をとるわ」
手荒な方法？　僕が呟くとリアは少しためらうそぶりを見せ、その方法を口にした。
「……今から街に出て奴らにあたしたちを襲わせる。吸血鬼の力が必要な状況を作り出すことによってあんたの現実逃避を終わらせる」
「……マジで？」
少しどころかかなり手荒な方法に僕は顔をしかめた。

ちょっとした余談なのだが僕はどうやら丸一日寝ていたらしく結果として学校をサボってしまっていた。携帯電話には加岳井からのメールが百八件。うん、僕は絶対に加岳井とは付き合わない。
その大半が僕の安否を気にするものだったんだが途中から「依怙贔屓（ひいき）ってカタカナにすると地球に優しそうですよね」とか最早どうでもいい文面に変質していた。
閑話休題。
「さっきも言ってたけど『魔術』って何だ？」
日付が変わって早数分。夜の帳が下りた街中を歩きながら横に並ぶリアに尋ねる。彼女はふん、と鼻を鳴らした。

「魔術は魔術よ。魔法って言った方が分かりやすいかもね。まあ、端的に言うと……世界と同化してその世界に内包される奇跡を行使する術、かな？」
「……んなばかな。魔法なんて物語の中にしかないモノだろ」
　僕の指摘にリアは肩を竦めて溜息を吐いた。
「はぁ、人間はそんな固定概念に縛られてるから愚かなのよ。この世には魔術はあるしそれ以前に科学では解明できない事柄は沢山あるのよ。現にあんたの目の前に吸血鬼がいる。魔術があったって何も不思議じゃないわ」
　愚か呼ばわりにイラっときたが抑える。今はそんなことで言い合いをする時ではない。
「それに魔術協会が必死に隠匿してるから知らなくて当然よ。てゆーか、一般人が知っちゃったら口封じのために消されるわねー、あははは」
「笑い事じゃねえ！　……魔術協会ってのはそんな物騒な組織なのか？」
「あたしたち化け物にとっては危ないわね。さっきも言ったけど魔術協会は異端審問が主な仕事なの」
「つまり、人間にとっては無害ってことか？」
「そういうこと。異端を排除し正統を保つ、謂わば世界の秩序を守ってるって事」
　なんかそう聞くと――
「いい奴らに感じる？」
　考えていたことを当てられて僕は内心動揺した。リアは忌々しそうに舌を打つ。
「いい奴らな訳がない……！　あいつらは秩序を守るだけで人を守っているわけじゃない。だからあいつらは手段を選ばない。一つの異端を排除するためだけに街を一つ崩壊させるような奴らよ！」
「……」
　恐らく、彼女は直面してしまったのだろう。自分のせいで崩壊す

る街に。
ならば、彼女の怒りは魔術師に対しての怒りと?自分自身への怒り?。
吸血姫と呼ばれる異端が存在しているばかりに無関係な人々が命を落とした。
僕ならば、堪えられない。自責の念に駆られ自暴自棄になり何をするか分からない。
命を、絶ってしまうかもしれない。
目の前の少女はなんて強さを持っているのだろう。だけども、この少女に儚さと危うさを感じ取ってしまうのは何故だろう……。
「……来たわ」
駅から離れ人気のない路地裏を歩くこと数分、路地と路地が交わる十字路で前方を歩くリアが呟き、路地裏の出口を鋭く睨みつける。そこにはいつの間にか二人、スーツを着た男性と女性がいた。生気のない胡乱な四つの瞳が僕らを見つめる。
「シキミ、あんた喧嘩の経験は?」
「……生憎とない」
「まあいいわ。まずあたしが仕掛けて一匹倒すからあとは死なない程度にボコられなさい」
拳を構える僕の横でリアは懐から複雑な文字と紋様が描かれたトレーディングカードのような物を一枚取り出した。
こちらの出方を窺っているのだろうか、ヒトガタは動かない。何かがおかしい。漠然とした不安を感じるのだがその不安が何なのかが分からずに唯ひたすらに不快なモノを感じる。
「■■■■■――ッ!」
振り向いた時には既に遅かった。咆哮をあげ宙を舞うヒトガタの直線上にはリアがいて――
「くっ!?」
咄嗟にリアを突き飛ばしヒトガタの軌道に己の身体を割り込ませる。刹那、衝撃が全身を貫いて地面に背中をしたたかに打ち付けら

れ、ヒトガタに組み敷かれる形になる。視界の隅に残りのヒトガタがこちらに向け、駆けてくるのが映った。
「リアっ、逃げろ！」
「で、でもっ！」
「いいから！」
今にもヒトガタに飛び掛かりそうなリアを制しながら僕に圧し掛かっている女性を退かそうと力を込めるがその細腕に似合わない凄まじい力の前には僕の抵抗は無意味らしい。
「……シキミっ、絶対に戻ってくるからそれまで死ぬんじゃないわよ！」
背を向け撤退するリアを二匹のヒトガタが追跡する。リアは子供がギリギリ通れそうな道とは呼べない隙間にその華奢な体躯をねじ込むようにして姿を消した。
二人のヒトガタは己の体格ではそこに入ることが叶わないことを察したのか大通りへと駆け出した。それを見届けてから僕を組み敷くヒトガタを睨みつけた。
「くそっ、何なんだよコイツは……」
「それは魔術によって生み出された活きる屍――屍鬼（しき）だ」
夜闇を押し潰す低い声が響く。
白髪は短く、漆黒に包まれた世界において異様な存在感を放つ。翠玉の瞳は研ぎ澄まされたナイフのように鋭い。その端正な顔の色は青白くまるで死人のような印象を受ける。スラリとした長身を包むのは闇よりも深い黒色のスーツ。
重く低く、存在する全ての者を竦ませる圧倒的な存在感。吐き気を催す程の濃厚な殺意を滲ませたその男は確かにそこにいた。
本能が叫ぶ。
こいつが僕の――僕たちの敵であると……！
「……ヴァン……フリークス」
「ほう、姫君から俺を聞いているか」
「僕を、どうするつもりだ」

「何、今は殺さん。貴様には利用価値がある。俺は面倒が嫌いなのでな、率直に言おう」
魔術師はただでさえ濃厚な殺意に敵意を滲ませながら己が要求を語る。
「吸血姫を呼べ。俺の要求はこれだけだ」
「……僕が呼んだところで来るわけないだろ」
この男と対面したらその死は必定。そんな存在の前に出会ったばかりの僕を助け出す為に現れるとは考え難い。
「来るさ。あの姫君はそう易々と眷属は造らんのだからな。折角の手駒をこんな詰まらんところで失うのは手痛い損失に他ならない」
黒い魔術師は表情なく歩み出す。彼が一歩前に出る毎にその身に纏う覇気が増し恐怖と狂気がこの身を苛む。
歩みが止まる。
翠玉の瞳と僕の瞳が合い、魔術師は眉をしかめた。
「いや、待て。貴様……、本当に眷属なのか？」
僕は答えない。恐怖に身体を竦ませながら僅かな敵意を瞳に乗せ魔術師を睨みつける。
魔術師は無言で僕の頭を掴み、持ち上げる。地面から足が離れまさしく宙吊りの状態。
頭蓋を砕かんばかりの圧力に呻き声を上げる前に地面に後頭部を叩き付けられた。
「が、――ぁ」
鈍い音が響き、瞳の中で火花が散る。灼熱する後頭部は割れたのか砕けたのか、ぬめりを持った水気を感じた。後頭部をかち割った魔術師は言葉もなく患部を眺めて舌を打った。
「修復する兆しはなし……か。眷属ではないのか。否、しかしならば腹部の致命傷が修復するのはおかしい。だがしかし――」
魔術師は顎に手を当てて暫し思案していたがその思考が何処かに行き着いたのか、は、と笑いをこぼした。聴く者全てに不快な感情を与える嘲笑を漏らし目の前の死に体から手を放した。

「此処(ここ)まで堕ちたか、吸血姫。よもや唯一の能力すら仕損じるか……。所詮は？力を待たない出来損ない？か」
「どういう……事だ……？」
「姫君から何も聞いていないのか。……くくっ、貴様は最早道化だな」
魔術師はくつくつと嗤う。……癪に障る、嗤い。
男は嗤いを治め、唐突に切り出す。
「？アレ？は吸血鬼の王族だが？それだけ？だ。
本来吸血鬼は並外れた体術や強力な魔術を遣い、他者を操る魔眼を所持する最強種。しかし？アレ？はそのどれもが使えない失敗作。――眷属を産み出すしか能がない『種馬』だ」
「そんな話、僕は聞いて――」
「プライドが邪魔したのだろう。己が欠陥品などと語るにはな」
下らん女だ、魔術師の口許が歪み、その鋭利な瞳は侮蔑の色を帯びる。
「眷属ではない貴様に用は無いが、手駒は多いに越したことはないのでな。
貴様も屍鬼に成って貰おうか。――がその命はいらないな」
黒色の男は背を向け歩き出す。最早興味などないと云わんばかりに。
「――死ね」
その命令はあっさりと下された。傍らに控えていた一人の屍鬼が後頭部から血を流す死(ぼく)に体に覆い被さる。理性が外れ、生前の数十倍の腕力で僕の身体に圧力を掛けてくる。
ばきっ。胸骨が砕けた。
べきっ。肋骨が砕けた。
ずぶっ。折れた肋骨が肺に突き刺さった。
「――ふざ、けんな」
肉体の崩壊なんてどうでもいい。今は只、憤っていた。
戦闘能力がないことを隠していた吸血姫に。

この身を砕こうとする活きる屍に。
何の役にも立たない脆弱な身体に。
目の前の恐怖に屈してしまった弱い心に。
そして何よりも――彼女を侮辱した黒色の魔術師に。
活動を止めていた血流が高速で巡り出す。視界が鼓動に合わせて明滅する。まるで眼球に脈があるかのように。
どくん、どくん。
自身の存在が希薄に感じるほどの鼓動。
朽ちた心が黄泉帰りを果たす刻(トキ)。
この身に満ちる真紅の雫を幻視した。

†

「貴様、何をした……」
『平和の創り手』は問う。けれども僕は答えず、目の前の原型を失くした肉塊を眺めていた。その肉塊は先程までこの身を砕いていた理性無き獣。――嗚呼そうか、これは？僕が殺(や)ったのか？。
「何をしたと聞いている……！」
「黙れよ、魔術師」
既に身体の修復は済んでいる。五体も五感も問題はない。
「貴様、その瞳の色、は――」
驚愕に身体を硬直させていた魔術師は紅蓮に輝く瞳を見とめ、嗤った。
「覚醒、したか。……ふん、ならば都合が良い。俺と来て貰おうか、吸血鬼」
僕は無言で駆け出す。いや、駆け出すなんて生温いものじゃない。射出……そう、拳銃から射出された弾とかそんな感じ。
生物の限界を超えた動き。十歩程の距離を一息に詰め、そのまま

――

通り過ぎた。

「あれ？」

疑問の声を上げる。瞬間、

「莫迦か、貴様は」

背中に強烈な衝撃。堪らず薄汚れた地面に倒れこんだ。

何だ、何が起こった？

「こ、のおおお！」

起き上がり様に拳を振るう。だがそれは首を傾けるだけで躱され、その拳は壁を粉砕しただけだった。

第二撃。左の拳を鳩尾に向け、放つ。その拳が狙いとは少しずれて胸に向かったがどうでもいい。当たればいいのだ。

刹那、僕は宙に浮いていた。

「へ？　――がっ！？」

またしても背中に衝撃。あまりの衝撃に息が詰まったがそんなことが気にならなくなるくらい僕は混乱していた。

状況を確認。僕は地面に横になり空を見上げている。投げられたのか？

立ち上がる。吸血鬼の再生能力のおかげでダメージはない。

「もう諦めたのか、吸血鬼」

「うる、せえっ！」

自分を鼓舞するように叫びながら飛び掛かった。

右の拳を振り上げ、目の前の男を殺すつもりで飛び掛かる。そして、必殺の威力を孕んだ一撃を突き出した――が、

「児戯にも劣るぞ、貴様」

あっさりと、それは止められた。いや、正確には？受け流され？た。

武の型で。僅かに手を添えた、最小限の体捌きで受け流された。

「っ！？」
驚愕。目の前に佇む男は魔術師だというのに何故こんな――
「人間臭いだろう。当然だ、俺達魔術師は？人間？なのだからな。貴様ら異形の存在とは遠くかけ離れた脆弱な者なんだよ。だから――」
ごく自然な動作で、突き出した腕を掴まれる。あまりにも自然過ぎて腕を引くという反射的な行動も取れなかった。
「――このような誰でも得られる戦闘法を身に付ける必要があるのだ」
ぶん、と風を切る音が耳朶（じだ）を打った瞬間、僕は壁に叩き付けられた。壁にはクモの巣状にヒビが入る。
「がっ……ぐ、ぅう」
たぶん、内臓器官と骨がやられた。だが、その傷すらこの身体は一瞬で再生した。
「貴様ら眷属はどれも変わらんな。超人になったという、下らん思い違いをし、簡単にその心臓を抉られ死に絶える。……実に下らんな」
黒色の魔術師は翠玉の瞳から敵意を消し去り、吐き捨てるように言う。
「貴様は特に酷いな。下の下のさらに下、腕力ばかりの赤子と同義。振るうための力に振り回されているだけの餓鬼だ」
魔術師は瞳を閉じ、手の平を突き出し――
「――顕（で）在化ろ」
紡がれる詠唱。
ォオン、と魔術師と世界が共鳴する。瞬きの後、黒色の魔術師の手には三日月を模したような黒い鎌が握られていた。
何処までも黒く、鋭くて、汚れた魂を断罪する死神の鎌。
「貴様の再生力が尽きるまでその四肢を切り落とすことをここに宣言しよう」
認識した時には遅かった。

認識した時には右腕がなくなっていた。
「なっ……あぁぁぁ！？」
痛みというより驚きが大きかった。肩からばっさりと切り落とされた腕は地面に落ちた時には消え去り、代わりに新しい腕が生えていた。
だが直ぐに両足に違和感を感じたと思ったら空を見上げていた。足が、両足が切り落とされたのだ。
「ひ、ぁあっ！」
あまりの恐怖に上げかけた悲鳴が引き攣る。倒れた獲物に追撃を掛けるべく迫り来る男から後転を繰り返し距離を取ろうとするが、右腕を切られた。
再生した両足で大きく跳躍し、今度こそ魔術師と距離を取る。
圧倒的な力。
異様な力。
最早反則と言って良いとさえ思える力を持った黒色の魔術師は嘲りを含んだ嗤いを浮かべる。
「さて、まだ終わらんのだろう？」
その言葉に返す余裕はなかった。
次元が違う。最早、目の前の生物とはレベルが違い過ぎる。
殺される。僕は絶対殺される――！
無理だ、逃げろ逃げろ逃げろ！　尻尾を巻いて惨めたらしく逃げろ！　純粋な身体能力なら劣っていない筈。本気で全力で死ぬ気で逃げれば逃げ切れる筈だ。この街から――否、国を出てしまおう、追ってくるのなら更に逃げればいい。一人ならきっと何処までも逃げ――
「うる、せぇ――！」
心を侵食する黝（あおぐろ）い恐怖を捻じ伏せる。有り得ない。目の前の男から逃げるという選択肢は有り得ない。
今ここで僕が逃げ出してしまったのなら彼女――リアは遅かれ早かれ殺される。そして敗北してしまってもリアは殺される。なら、

絶対に、目の前の魔術師を――
「ふむ、心を折る事は出来ないか。精神力だけは高いようだな」
魔術師が迫る。漆黒の鎌の軌跡を視認できない程の一閃。その刃は逸れることもなく僕の左腕を断ち切った。
「……」けれども、僕は呻き声すら上げない。
このままでは間違いなく僕は負けるだろう。ならば、その前に渡良瀬榛が持つ唯一つの技能によって目の前の超人を打ち負かす。この手に必要不可欠である武具はないが無ければ創ればいいだけのこと。
思い描くのは刀。いや、その稚拙な想像（イメージ）は、凡そ刀とは呼べない代物だったが刃が付いているのなら問題はない。想像（イメージ）が固まれば固まる程脳髄に灼けるような痛みと熱が走る。
意識がドコかと繋がるのを感じる。ドコかとは此方（こなた）であり彼方であり――何処でもない。

言うなれば世界。

今僕はこの世の全てに繋がっている。
右手に力が収束する。世界から汲んだそれを、想像（イメージ）した物として確かな質量を持ってここに具現する。
不可能などない。
「？この身は――……」
何故ならこの身は人に非ず、偉大なる祖にして最強種、吸血姫の眷属なのだから――！
「――真紅の雫で満ちている？！」
世界が詠唱に共鳴する。右手には波打つ、陽炎のように不確かな、しかし確かに質量を持ったモノが存在した。
右手に握ったモノを振り抜く。それは魔術師を凌駕する速度で迫り、漆黒の鎌を二つに断ち、魔術師の左腕を肩から切り落とした。
「ぬ、ぐっ――！？」

苦悶の声を上げ咄嗟に距離を取る魔術師を追うべく一歩を踏み出した。
刹那、何かが脳裏に流れ込んできた。
それは膨大な情報だった。
世界が誕生してから幾千年の世界の記憶。繁栄や衰退を繰り返す歴史。幸せな家庭を築く家族が映し出されたと思ったら次に映るのは死体の山。戦争をしているのか、多くの人間達が互いに殺し合う映像。
ビジョンが変わる。そこは空と地上のそれぞれに月があった。地上の月は湖の水面に映った空の月。
風が吹く度に湖は揺れ、緋色の水にその姿を揺らがせる。
その湖の脇にそびえ立つ城を見て、なんて幻想的なんだろうと思った。まるで物語に出てくる姫が住まう城のよう。
だが城は、燃えていた。
またビジョンが変わった。眼前では人と人とが殺し合っている。その先頭に立つ男を知っている、ヴァン・フリークスだ。フリークスは漆黒の鎌を操り、炎を生み出し、風を呼び、雷を落とす。暴風のような攻撃を受けた者達は直ぐ様立ち上がる。あれは、吸血鬼なのだろう。
今度のビジョンは豪奢な一室だった。そこには長い金髪の少女、短い金髪の女性と白い髪を結わえた女性が居た。
短い金髪の女性は白い髪の女性に金を渡しているらしい。それを受け取った女性は頷き、少女を担ぎ上げる。少女は瞳を潤ませながら長い金髪の女性に何かを言った。言われた女性は潤んだ瞳を細めて微笑み、手を振った。
白い髪の女性は窓を蹴破り、破片を気にすることなく飛び降りた。
瞬間、豪奢なその部屋の扉が蹴破られた。
「何、だ。今の――――ぐ、がぁっ！？」
そのビジョンが終わった瞬間、様々な記憶が雪崩れ込んでくる。膨大な情報に精神が着いていけず、頭痛となって僕を苛(さいな)む。

堪らず地面に倒れ掛けるが手に持ったモノを地面に突き刺して凌いだ。
「……魔術を行使したことは驚嘆に値するが、世界に呑まれては意味がないな。貴様はもう助からんよ、そのまま世界に呑まれ、廃人と化せ」
魔術師の言葉が、理解できない。
僕は――いや、俺？　私……？
■は一体誰だ？

「――――こんの、馬鹿シキミいいいいっ！！！！」

闇夜を切り裂く絶叫。刹那、思考不能に陥るくらいの衝撃を側頭部に見舞われた。
その衝撃で陽炎の様な刀は消え、ずざぁー、と音を立てながら地面に顔面を削られる僕。あまりの痛みに頭を抱えて悶えた。悶絶しつつ瞳を開いてみると長い金髪（ブロンド）をなびかせて蹴りを放った姿勢（やはり片足立ち）の少女を見つけた。片足を降ろした少女はずんずんと、地面で蠢く芋虫（ぼく）に近付くと襟首を掴んだ。
「り、リア？」
「あんたホントに馬鹿！　素人が魔術を遣うなんて無謀過ぎ！　いっぺん死ね！　いややっぱ死ぬなっ！」
額と額がくっつくぐらいの至近距離。いや、最早、零距離なんだけど。
その距離になって初めて、リアの瞳が潤んでいる事に気付いた。思わず息を呑む。一瞬、なんて言葉を掛けようかと悩んだが、
「あー、何か。そのごめん」
とりあえず謝っていた。いやこう、雰囲気的にね。
「外的ショックにより精神を世界から切り離したか。……出鱈目な奴らだ」
そこで思い出す。まだ、危機は去ってないのだ。

リアは直ぐに僕から手を離し懐から取り出した複数のカードを扇状に広げる。僕も立ち上がり、リアの横で拳を構えた。
「久しいな、出来損ないの姫君。この夜の逢瀬が果たせて、俺は嬉しいよ」
「鳥肌が立つようなことは言わないで貰えるかしら？　『神戯』にぶっ殺されたと思ったけど、存外しぶとく惨めに生きているのね、老害。
さっさと隠居でもして若人にその席を譲ってあげたら？」
「悪いが隠居するのは時期尚早だろう？　まだ、仕事が終わっていないのでな」
「あっそ。なら殉職という形で終わらせてあげるから泣いて感謝しなさい」
何だろ、この二人の会話に付いていけないのが結構ムカつく。
だから、とりあえず口を挟んでみた。
「お喋りはそれくらいにしようか。生憎こっちはお前たちが何言ってんだか全く分かんねえんだよ」
「ふむ、それもそうだな。では、――今宵は退散するとしよう」
「負傷した獲物を逃がすと思う？　普通の人間ならショック死してる傷よ、あんた」
僕の眼前に転がっている腕を見る。自分がやったなんて認識がなかったので今更になって胃酸が込み上がってきた。次いで魔術師の腕があった場所を見る。当然そこに腕はないのだが、何故か傷口から血が出ていない。……魔術で止血したのだろうか？
確かに腕をぶった切られれば痛みに心が耐え切れずに心臓が停止しそうなもんだ。だが、魔術師は無表情で、まるで痛覚が存在しないんじゃないのかとさえ思った。
「いや、逃げれるさ。それに、片腕でも貴様らを相手取ることは可能だが殺してしまうかもしれない。殺してしまっては？意味がない？」
「は？　殺すのが目的なんじゃないの？」

リアの問い掛けに答えずただ不吉な嗤いを浮かべる魔術師。その嗤いが癪に障ったのかリアは一枚のカードを抜き取りフリークスを射殺さんばかりに睨み付けた。
「呪札(じゅさつ)か。やれやれ、それさえ無ければ貴様を捕らえる事はそう難しい事ではないのにな……。『神戯』の奴も厄介なモノを創ったな」
「あんたの思惑なんてどうでもいい、だから今ここで死に絶えなさい。？顕現せよ――」
手に持ったカードが詠唱に呼応するように燃え上がる。そしてフリークスの頭上に巨大な幾何学模様――魔法陣が浮かび上がった。
「――打ち砕(ミョルニル)く雷槌？……！」
刹那、魔法陣が弾けた。
弾けた魔法陣から幾筋もの雷槌(いかずち)が落ちる。まるで昼が訪れたと錯覚させる程の光が照らし、圧倒的な熱と衝撃を伴って魔術師を焼き尽くすべく落下する。
だが当たらない。黒色の魔術師はその巨躯で、軽やかに踊るように全ての雷槌を躱す。
「く――っ！？　？顕現せよ――刺し貫く(カラドボルグ)雷鳴の剣？……！」
放たれる第二撃。それはリアの手元を離れ、高速で飛来する雷鳴の剣(ツルギ)。魔術師は雷槌を躱した直後ということもありこの一撃を躱す事は出来ない。
そう、魔術師は躱すことはしなかった。
「？赤き罪悪に血の断罪を――――？」
静かに紡がれる詠唱。
その時には彼は動いていた。
鼓膜を打つのは電気系統がショートした様な音。迫り来る雷鳴の剣を魔術師が右の拳で殴り付けたのだ。弾き返された剣は当然、術者――リアの元へと飛来する。
「なっ、嘘！？」
「くそっ！」
地を蹴り、リアごと地面に転がり込み、間一髪雷鳴の剣を躱した。

受け身を取り直ぐに立ち上がる。リアはそのまま転がって行ったが気にしている暇はない。先程まで雷槌が降り注いでいた場所は無数の穴が穿たれていた。コンクリート片が周囲に散乱している。
そこに黒色の魔術師はいなかった。周囲を見回すがその姿を見付けることはできー――
「貴様、名は？」
「――っ！？」
その声は直ぐ背後から。声と圧倒的な威圧を受けた背筋がビリビリと震える。僕は振り向くことなく答えた。
「渡良瀬、榕」
「毒々しい、名だ。――認めよう、貴様はこの俺、『魔術協会』序列六位、『断罪』の敵だ。次に相見える時までに、死合うことが出来るほどの力を蓄えておけ」
でなければ詰まらん、最後にそう呟き、背後の声は途絶えた。
息を吐く。そこで僕は自分が呼吸を止めていたことに気付く。
そして、振り向く。当然の様にそこには誰もいなかった。
「あぁーもう！　逃げられたいうより見逃して貰ったんじゃないのよー！」
「なぁ、リア……」
きぃー！　と怒り狂うリアの横で僕は空を見上げ、問い掛けた。
答えが判りきった問いを。
「僕は人間を辞めたのか……？」
「……そうよ、あんたはこのあたしの眷属。――人間じゃ、ないわ」
「……そっか。うん、そっか」
彼方に浮かぶのは、穢れを知らない白き月。
今は、目も眩むほどの太陽が見たかった。

†

郊外のある廃屋。
月明かりに淡く照らされた一室に隻腕の男が座り込んでいた。
人を射殺さんばかりに鋭い双眸は今は閉じられ、傍から見れば眠っているように見える。当然、眠っているわけではない。周囲の気配を探っているのだ。
「来たか」
呟き、瞳を開く。無機質な翠玉の瞳に月の光が反射する。廃屋に響くのは一人分の足音。十を数える時間が経ち、待ち人は現れた。
「何の用ですか、フリークス」
それは女の声だった。女というより少女の声。それは何処までも鋭利で、そして何処までも透き通る凛とした声。不機嫌さを隠しもしない声色にヴァン・フリークスは笑みを浮かべた。
「何笑ってんですか、ぶっ殺しますよ」
「相変わらず物騒な物言いだな。誰にでもそうなのか？」
少女は答えない。出来るだけこの男と会話をしたくないらしい。
「まあいい。貴様にも報告ぐらいはしようと思ってな」
「貴方が片腕をもぎ取られておめおめと逃げ帰ってきたという報告ならいりません」
「ん？　あの場に居たのか？」
「今の貴方を見れば猿でも判ります」
それもそうか、と呟いた彼は月明かりの届かない部屋の隅に立ち尽くす少女に向けて淡々と告げた。
「姫君が眷属を造った」
そんなことは判っていると言いたげに視線を向ける少女。彼は更に付け加えた。
「名を――渡良瀬樒という」
「わたら、せ……？」
少女が身に纏っていた殺意が霧散する。代わりに彼女を支配するのは驚愕と動揺。フリークスは少女の様子に構う事もなく、報告を

続ける。
「素手での戦闘能力は素人以下だが、剣才だけならば俺を凌駕している。そして何より、奴は魔術を行使した」
「……渡良瀬樒は魔術師だったのですか」
「いや、造り出した刀は顕在化しきれていなかった上に、行使直後に世界に呑まれ掛けていた。よって奴は魔術師ではない」
少女はほっと胸を撫で下ろした。
――彼は一般人だったのですね。
「知り合いなのか？」
「……貴方には関係ありません。渡良瀬樒――眷属は私がどうにかしましょう、貴方は黙って見ていなさい。――吸血鬼が相手なら私に負けは有り得ません」
自信に満ちた少女の言葉を受け、くつくつと陰鬱な嗤いを浮かべる魔術師に、
「嗤うのをやめてください。実に不愉快です、とどめを刺してあげましょうか」
「くくっ、済まない。だが、貴様は情報収集と俺のサポートを任せられているのだろう？　前線に出ても良いのか」
「負傷した者が何を言ってるんですか？　貴方の尻拭いを私がしてあげるんですよ」
尻拭い、というところをわざわざ強調する。もうここに用は無いと踵を返す少女。その仕草に彼女の長い――長すぎる黒髪が流れるように揺れた。
少女の名は加岳井美桜（かがくい みお）。
渡良瀬樒の数少ない、友人の一人だった――――。

／2（後書き）

申し訳ありませんが、一度ここで更新をストップします。全てを書き切ってから順次投稿という方法を取らせていただきます。もしも拙作を読んでくださっている方がいらっしゃったら本当にすいません。

更新遅い・説明下手・妄想乙な私ですがこれからも生暖かい目で見てやってください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5775x/

真紅の雫が満ちる夜

2011年12月30日03時30分発行